

作物名：ねぎ

病害虫名：葉枯病（病原：Pleospora allii※1、Pleospora herbarum
※2、Stemphylium botryosum）

不完全世代 ※1: Stemphylium vesicarium、※2: Stemphylium herbarum

1 被害の特徴と診断のポイント

- 病徴は先枯れ病斑（写真1）、斑点病斑（写真2）、黄色斑紋病斑に区別できる。
- 先枯れ病斑は、生育中期以降の葉身先端部7～8cm程度が褐色を呈して枯れる。
- 斑点病斑は、葉身中央部にはじめ白色の小斑点が発生し、のちに小型～中型の楕円形～紡錘形の病斑を形成し、進展すると黒褐色～黒色の大型の同心輪紋状の病斑となる。病斑周縁は黄化し、病斑部より上部は枯死し、折れやすくなる。本病斑は、黒斑病と病徴が酷似するため肉眼での判別は困難であり、正確な診断には検鏡により分生子の形状を観察する。
- 黄色斑紋病斑は、生育後期の中心葉に黄色のモザイク様病斑を形成し、商品価値を低下させる。本病斑は単独で発生することはなく、先立って必ず先枯れ病斑または斑点病斑が発生する。



写真1 先枯れ病斑



写真2 斑点病斑

2 伝染源・伝染方法

- 被害植物上に偽子のう殻を形成し越冬する。翌春、偽子のう殻から子のう胞子が飛散し、第一次伝染源となる。その後、病斑上に形成された分生子が飛散し、二次伝染を繰り返す。
- 先枯れ病斑、斑点病斑上には多量の分生子を形成し、これが飛散して中心葉に付着、感染し黄色斑紋病斑を形成する。黄色斑紋病斑は、中心葉に分生子が付着するのみで胞子を形成しない。

3 発病しやすい条件

- 本病菌は糸状菌の一種で子のう菌類に属し、分生子および子のう胞子を形成する。（完全世代 Pleospora 属、不完全世代 Stemphylium 属）（写真4）
- 多雨、多湿の時期に発生しやすく、梅雨期、秋雨期など長雨が続くと多発しやすい。
- いずれの病斑も土壌 pH の低いほ場や窒素肥料の過多により発生が助長される。斑点病斑は、本病菌の単独感染も起こるが、主にべと病やさび病の発生後に二次的な感染により発生がみられる。黄色斑紋病斑は、生育後半の気温 15～20℃となる9月以降に曇雨天が続くと発生しやすい。

4 防除方法

- 多湿条件で発生しやすいので、ほ場排水及び通風を良くする。
- 多発してからでは薬剤防除の効果が得られ難いので、発生初期の防除を心がける。
- 被害残さは伝染源となるため、ほ場外に持ち出して土中深くに埋設するなど適切に処分する。
- 肥料不足は発生を助長するので、適正な肥培管理により、健全な生育を確保する。

5 出典

(1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除編3-②（農文協）
- 日本植物病名データベース（農業生物資源ジーンバンク）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真3 黄色斑紋病斑



写真4 葉枯病菌の分生子

（令和5年9月改訂）